

<特別活動>

望ましい人間関係をはぐくむ学級活動をめざして

—低学年における話し合い活動の工夫を通して(第2学年)—

南城市立船越小学校教諭 稲 福 須麻子

テーマ設定の理由

近年、国際化や情報化、少子・高齢化等で社会環境が著しく変化している中で、子ども達は様々な影響を受けながら日々の生活を送っている。放課後は部活動や習い事等で忙しい児童や、テレビやパソコンゲーム等の室内遊びに向かう児童、さらに集団遊びや野外遊び等の生活体験が不足している児童も増えてきたことが、人間関係の希薄化、規範意識の低下、生活習慣の確立等に大きな影響を与えてきたと言っても過言ではない。このような状況において、学校生活では、自分の考えや感じ方を相手にうまく伝えることができずに、友だちと対立したり、仲間はずれにされたり、また、自己中心的な考えをもっている児童が増え学級集団がうまく機能しない状況もある。

平成20年に改訂された小学校学習指導要領によると、特別活動の目標は、「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力を養う。」と示されている。特別活動は、社会生活を営むうえで必要な実践的な社会性の基礎をはぐくんでいくことであり、人間関係の希薄化等の教育課題を解決する手だてとして、有効な活動であると考えられる。そのため、楽しい学級生活づくりのための話し合い活動や、共通の活動の充実を図り、多様な集団活動などを行うことにより、望ましい人間関係をはぐくむ活動を充実させていく必要がある。

これまでの指導実践を振り返ってみると、話し合い活動を通して、日常生活の中から課題を発見させ、互いに意見を述べ合うことで、よりよい学校生活が送れるように取り組んできた。児童は2年生なりに、話し合うことを楽しいと感じ、毎回の学級会活動を楽しみにしている一方、発言者に偏りがあつたり、自分の意見にこだわりすぎる児童がいたり、自分の意見をなかなか言えない児童もいるのが現状である。また、他人のことに興味は薄く、学級で何かに取り組もうとしても、自分の興味のないことにはあまり協力しない児童や、仲のよい友達とだけ活動しようとする児童等も見受けられる。その原因として、児童の人間関係が未熟なために、協力してよりよい生活を築く事ができないことや、教師にとっては話し合い活動の指導を実践するうえでの手だてが不十分であった事等、人間関係づくりを意図した取り組みの支援が適切に行われなかったことであると考えられる。

そこで、本研究では学級活動における話し合い活動の指導の工夫をすることによって、集団としての学級が活性化され、人間的な触れ合いを深めていく中で、仲間意識が芽生え、協力し、互いのよさを認め合う関係が築かれる等、望ましい人間関係をはぐくまれると考え、本テーマを設定した。

<研究仮説>

学級活動における話し合いの場において、低学年における話し合い活動の指導を工夫することにより、児童が互いに認め合い、一人一人の意見を大事にするような望ましい人間関係をはぐくまれるであろう。

研究内容

1 望ましい人間関係をはぐくむとは

(1) 低学年における望ましい人間関係

「小学校学習指導要領解説特別活動編」(以下、「特別活動編」と略す。)では、全体目標だけでなく、新たに規定された各内容の目標にも「人間関係」が示され、特別活動全体として望ましい人間関係を築く態度の育成が重視された。特に、特別活動は、学級や学校の集団生活の中で、互いのよさを生かし、望ましい集団活動や体験的な活動を通して、社会性などを体得する大きな役割を担うものであると考える。特別活動編の中で、学級活動で育てたい望ましい人間関係とは、「楽しく豊かな学級生活づくりのために互いが尊重し、よさを認め合えるような人間関係である。」とされ、学級集団育成上や児童の発達課題に即した指導ができるようにするため、低・中・高学年の発達段階における内容を示している。「望ましい人間関係」と「具体的な活動」を目指す内容は、学年の段

階に応じ、下記の表に整理することができる。(表1)

表1 学年における望ましい人間関係

学 年	内 容	具 体 的 な 活 動
低 学 年	仲良く助け合おうとする人間関係	学級生活に進んで取り組み楽しい生活が送れるような活動
中 学 年	協力し合おうとする人間関係	自分のよさに気づき意欲的に学級生活をつくっていく活動
高 学 年	信頼し支え合おうとする人間関係	自分の役割を自覚し楽しく豊かな学級や学校生活をつくろうとする活動

特に、低学年の児童の発達の特質においては、幼児期の自己中心性がかなり残っており、学校の中の児童相互の関係は、個々の単なる集合の段階にあると言われている。また、教師と児童との関係が中心で、児童相互の人間関係は少ない。さらには、行ってよいことと悪いことについての理解はできるようになるが、感情的、衝動的な言動が多く、入学期に小学校生活や集団生活にうまく適応できなかつたり、このことによって授業が成立しにくい状況が生まれたりするなどの、いわゆる小1プロブレムの問題も生じてくる。第2学年になると、活動の中心となる児童が目立ち始め、他人の立場を認めたり、理解したりしようとする態度や、よりよい学級生活を築こうとする自主性なども次第に高まってくる。また、学級全体に目を向けたり、学校に対する所属感を少しずつ深め、さらには、役割を分担して活動したり、きまりの大切さを認識して生活したり、遊んだりすることができるようになる。

しかし、2年生といっても、発達段階に個人差があり、人間関係がまだまだ未熟で自己中心的な児童がいたり、自分に自信がもてず、人間関係に不安を感じている児童も多いと考えられる。そこで、低学年の学校生活における集団活動の発達の特質を踏まえ、学級や学校における集会活動や係活動などを通して、みんなと一緒に活動する楽しさを体感させたり、学級会において自分の意見をしっかりと述べることや、友達の意見をしっかりと聞くことの大切さを理解して話し合いができるようにし、「話し合いでの集団決定」や「低学年の発達段階における教師の関わり方」を工夫する必要がある。さらに、学級内のグループ活動を協力して行うことを通して、個々の児童が望ましい人間関係を築く態度の基礎を身に付けることができると考える。

(2) 望ましい人間関係をはぐくむ学級活動

相原次男他(2010)によると、「望ましい人間関係づくりは特別活動の各活動や行事で実践されるが、その原点は学級であり、望ましい人間関係は主として、学級づくりの中で、学級づくりを通して形成される。」と述べている。また、「学級づくりは、安心と信頼の人間関係を創り出し、個々の子どもの、学級(集団)への身体の所属だけでなく、心の所属を保障していく営みである。」と言い、「仲間が好き。先生も好き。この学級ですっと勉強したい。」という、「子どもの心の所属を保障し、人間関係の質を高め、安心して自分の考えや思いが表現できる学級の雰囲気(支持的風土)づくりとともに、グループで活動する機会をどれだけ多く設定するかにかかっている。」とも述べている。

そこで、学級の実態や児童の発達段階などを考慮して、効果的な話し合い活動の指導の工夫をすることが大切である。そのためには、学級におけるさまざまなグループづくりから始め、二人組、三人組、四人組とグループの人数を増やし、互いのよさを気づかせる場の設定と指導を意図的に行うようにする。そして、他の児童から自分のよさが認められ、うれしいという満足感を味わう経験を持たせることができれば、一人一人のよさが認められ、存在感や連帯感を持った児童が増えると考えられる。さらに、このようなグループ活動を通して、個のよさが認められ、自分への自信を高め、いろんなことに積極的に挑戦することによって、互いが成長でき、望ましい人間関係をはぐくむ学級活動ができると考える。

2 発達段階における話し合い活動について

今回の改訂で、各学年において取り上げる指導内容の重点化や発達の課題を踏まえ、指導にあたる必要性が指摘され、学級活動内容の「(1) 学級や学校の生活づくり」の「話し合い活動」において「発達段階に即した指導のめやす」を具体的に示している。(表2)

表2 発達段階に即した指導のめやす

形 態	学級活動の内容	話し合い活動
低 学 年	・学級を単位として、仲良く助け合い学級生活を楽しくとともに、日常の生活や学習に進んで取り組もう	・教師が進行等の役割を受け持つことから始め、少しずつ児童がその役割を担うことができるようにしていく。 ・友だちの意見をよく聞いたり、自分の意見を言えるようにした

とする態度の育成に資する活動を行うこと	して、学級生活を楽しくするための集団決定をすることができるようになる。
---------------------	-------------------------------------

低学年の話し合い活動は、教師が話し合いの司会の役割を受け持ち、記録についても担当するなどして、話し合いの進め方を実際に児童が見て、理解できるようにする。その後、司会や記録の役割の一部を児童に任せ、教師の助言を受けながら、話し合いの進め方を実践を通して身につけることができるようにすることが大切である。また、事前に自分の考えをもって参加できるようにしたり、あらかじめ示された話し方や手順に従って意見を発表し合ったりすることも大切である。さらに、互いの意見をよく聞いたり、気遣ったり、仲よく助け合ったり話し合いを進め、学級生活を楽しくするための集団決定ができるように適切な指導をすることが必要である。

これらを踏まえ、低学年の児童にとって、学級を意識させ、学級活動を楽しめるものにしていくために、みんなで何かをすると楽しく、そして仲良くなるという実感がもてるような活動内容を工夫することが大切であると考えられる。

(2) 学級活動における話し合い活動

杉田洋(2009)によると、「話し合い活動は、生活上の諸問題を話し合いで解決したり、進んで自分の考えを表現したり、意見の異なる人を説得したり、協同的に議論して他者の思いや願いなどを理解して集団としての意見をまとめたり、よりよい人間関係を構築しながら生活しようとしたりする資質や態度の育成が求められる。」と述べている。学級会には、人間関係を形成する力を育てることを基盤に据え、活動の準備や計画立案をする等の「事前の活動」、実際に話し合う「本時の活動」、話し合いの結果を実行したり反省したりする「事後の活動」の三段階の活動がある。そこで、本校の児童の実態も同様に言えることであるが、低学年の児童には、このような活動過程を理解させる前に、まず、学級会そのものについて指導する必要がある。所属する学級などの問題について、解決するために学級会という場で話し合うということ、低学年にも分かりやすい言葉で教える。

次に、進行するための司会や記録をする役割が必要である。それから、だれの意見も最後まで聞くなど、学級会のマナーやルールを教える。そして、常に提案理由を意識しながら、考えたり発言したりする事ができるようにし、決まったことには気持ちよく従うことや、折り合いをつけることの大切さもしっかりと教える必要がある。つまり、話し合い活動が段階的に子どもたちの手で進められ、自分たちの力で課題が解決されたとき、子どもたちが集団の一員としての自覚や所属感が高められたり、また、自分の意見を受け入れてもらい、友だちのよさを認めることによって、互いのよさも認め合い望ましい人間関係がはぐくまれると考えられる。

3 話し合い活動の指導の工夫

(1) 具体的な指導の工夫

学級活動における話し合い活動においては、1 単位時間の指導計画を工夫し作成する必要がある。そのため、「事前の活動」、「本時の活動」、「事後の活動」の三段階の活動で子ども達が充実した活動にするために、低学年の発達段階における教師の指導として「事前活動の指導」、「本時の指導」、「事後活動の指導」を工夫する必要がある。

① 「事前活動の指導」の工夫

話し合い活動の本番を迎えるためには、議題の収集、議題の選定、話し合いの計画などの「事前の活動」が必要になってくる。まず、議題の提案は学校生活の中から、みんなでやってみたいこと、考えてほしいことなどを問題として取り上げられる議題をみつけさせ、「朝の会」や「帰りの会」などで議題用紙を配り、議題とその理由を書かせ、議題ポストに入れさせる。次に、計画委員会で議題と提案理由を決定させ、話し合いの進め方の計画をさせる。そして、役割分担を決めさせ、シナリオの読み合わせをさせる。議題の告示や提案者の決定は、「朝の会」で知らせる。それから、低学年の発達段階では、1 単位時間の話し合い活動では、最後まで話し合いを終わらせることができないため、事前に学級指導で議題と学級会のめあて、自分の考えやその理由を「学級会ノート」に書かせておく必要がある。また、教師は、児童が「学級会ノート」を書いた後、児童の考えやその理由に目を通し、児童の考えに対して共感し、認め、自信を持って言えるような一言コメントを入れて意欲を高めるようにする。

② 「本時の指導」の工夫

話し合い活動は、司会団を中心に話し合いを進めさせ、司会が困ったときにすぐに手助けできるように、教師はなるべく司会の近くに座るようにする。また、話し合い活動の始めは、児童の

意欲を高めるために、「学級の歌」を元気よくうたわせ、学級会の雰囲気づくりをする。そして、話し合い活動が活発になるように、意見や反対意見の述べ方として自分の意見とその理由をつけて発言するようにさせたり、意見が出ない場合はペアやグループ活動を取り入れて、一人一人の意見が表出できるようにさせる。それから、自分の意見と友だちの意見を比べながら聞かせ、多様な意見を生かして自己決定や折り合いをつけて集団決定ができるようにさせる。その後、話し合い活動の振り返りとして、友だちのよかった意見や自分の頑張ったことを「学級会ノート」に書かせ、発表させる。

③ 「事後活動の指導」の工夫

「本時の活動」後、黒板記録係の児童が決まったことを、ミニ黒板に書いてみんなに知らせる。そして、実践の準備がスムーズにできるように、それぞれ役割分担をさせ、みんなで協力して準備をし、教師は必要な材料や道具を揃えておく。実践活動は、自分の役割を意識させ、話し合いで決まったことを守らせ、みんなで協力して仲良く活動できるようにさせる。そして、実践活動後は、振り返りとして「学級会ノート」に、気づいたこと、感じたこと、思ったこと、友だちのよいところなどを書かせて発表させ、教師は望ましい人間関係ははぐくまれたかどうか確認しながら、児童の頑張りを賞賛し次の活動への意欲づけをする。

このように、「事前活動の指導」「本時の指導」「事後活動の指導」を一つの型として整理し、それぞれに関する教師の指導の工夫と合わせて、以下の(表3)の通りに作成した。

表3 低学年における「話し合い活動」の指導の工夫

課程	児童の活動内容	教師の指導
事前活動の指導	・議題の提案をする。	○「朝の会」や「帰りの会」などで声かけをする。 ○基本的には、年間指導計画に基づいて行う。 ○いつでも書けるように、議題用紙と議題箱を設置しておく。
	【計画委員会】 ・議題の決定をする。 ・提案理由の決定をする。	○計画委員は、輪番制で行うようにさせる。 ○一緒に話し合いに参加し、議題を決定させる。 ○提案を出した児童に、提案理由を教師と一緒にまとめて書かせる。
	【話し合いの計画】 ・役割分担をする。 ・シナリオの練習をする。	○計画委員会の仕事内容を確認し、役割を分担する。 ○議題に沿った話し合いのめあてを決めたり、話し合う内容と順序を考え、シナリオの読み合わせをする。 ○学級会に必要なネームプレートやマグネットなどの準備をする。
	【朝の会】 ・議題の告示をする。	○計画委員会で選ばれた議題と提案者と話し合った計画を知らせる。
	【学級指導】 ・「学級会ノート」に記入する。	○「学級会ノート」の準備をする。 ○話し合いのめあては、前もって決めさせる。 ○事前に「学級会ノート」に目を通し、一言コメントを入れる。 ○発言の仕方や聞く態度の育成、賛成意見や反対意見の述べ方の指導
本時の指導	【学級会】話し合い活動 ・司会団を中心に話し合いをする ・元気よく「学級の歌」を歌う。 ・自分の考えと理由までを言わせる。 ・友達の意見はしっかり聞くようにさせる。 ・自己決定、集団決定をする。 ・振り返りをする。	○司会者が安心して話し合いを進めることができるように、司会者の近くに座って手助けをする。 ○提案理由を意識させながら、話し合いの柱に従って順序く進めさせる。 ○学級会ノートを活用し理由をつけて分かりやすく発言させる。 ○偏らない指名の仕方や採決の仕方を分からせる。 ○黒板記録係に発言内容を黒板に整理させる。 ○ノート記録係に黒板に書かれていることを正確に記録させる。 ○学級会ノートに友だちの良かった意見や自分の頑張ったことを書かせる。
	【話し合いの仕方】 ・話し合いのルールに沿って話し合	○話し合いの柱は、低学年の発達段階を考慮して、1つにする。 ○常に学級会のマナーやルールを確認する。

	せる。 ・建設的な意見を述べ、効果的に話し合いを進めさせる。	○意見が出ない場合は、ペアやグループで話し合わせる。 ○折り合いをつけて、集団決定をさせる。 ○ノート記録の児童が、頑張った児童を賞賛する。
事後活動の指導	【実践の準備】 ・それぞれの役割に分かれて、協力して準備をさせる。	○決まったことを、黒板記録係にミニ黒板に書かせる。 ○それぞれの活動の役割を分担する。 ○必要な材料や道具の準備をする。
	【実践活動】 ・自分の役割を意識させる。	○話し合いで決まったことは、みんなで協力して仲良く活動させる。
	【活動の振り返り】 ・活動の感想を「振り返りカード」に書く。	○気づいたこと、感じたこと、思ったことなどを「振り返りカード」に書かせ、発表させる。 ○活動について児童のよかった所や友だちと仲良く協力していた所などを賞賛し、次への意欲づけにつなげ、望ましい人間関係づくりを意識する。

以上のように、構想から計画、実践に至るまでの時間とその後の成長を考慮することによって、低学年の発達段階に応じた話し合い活動を進めることができる。そして、教師の「事前活動の指導」「本時の指導」「事後活動の指導」を工夫することによって、話し合い活動が活発になり、児童一人一人の意見が表出され、互いに認め合って望ましい人間関係をはぐくむことができると考える。

指導の実際

本研究は「望ましい人間関係をはぐくむ学級活動をめざして」をテーマとし、低学年の発達段階における話し合い活動の工夫を行い、研究を進めてきた。具体的には、「学級会ノート」を効果的に使ったり、友だちのよい意見や自分の頑張ったことを書き入れさせたり、ノート記録係の児童や教師からの賞賛等を取り入れることによって、互いに認め合える望ましい人間関係がはぐくまれると考える。

1 題材名 「学習発表会の計画を立てよう」(1)

2 題材の目標

- ・自分の考えを進んで発表したり、友だちの考えを聞いたりして、互いの意見のよさを認め合いながら話し合いができる。

3 評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
・児童一人一人が自分の考えを持ち、話し合いに進んで参加している。	・めあてに合った考えがもてる。	・友だちの考えを聞き、賛成や反対などの意思表示をしている。	・友だちの考えと比べながら、自分の考えをまとめている。

4 指導計画

指導過程	活動日時	活動内容	○教師の支援 *準備	
事前の活動	【計画委員会】① ○議題選定の確認をする。 ・学級会の準備	1 / 6 (木) 昼休み 放課後	○議題選定の確認をする。 議題ポストから議題の選出をする。	○前もって議題用紙に話し合いたいこととその理由を書かせておく。 *議題用紙
	【学習発表会について】	1 / 7 (金) 5校時 学活1時間	○学芸会と学習発表会の違いを分からせる。 ○2年生みんなが、楽しくなるような学習発表会を考えさせる。 ○学習発表会にやりたいことを考えてくる。	○みんなが、楽しく活動できるよう題材への内発的動機づけを行う。
		1 / 11 (火) 朝の会	○学習発表会について、考えてきたこととその理由を「学級会ノート」に書かせる。	○机間指導をし、書けない児童へアドバイスをする。 *「学級会ノート」
【計画委員会】②	1 / 11 (火) 昼休み	○議題の確認・役割・めあて・柱を決める。	○計画委員と一緒に計画を立てる。	

		放課後	○議題設定の理由を模造紙に書いておく。	*シナリオの準備
本時の活動	【学級会】 「学習発表会の計画を立てよう」① ・進行させる（司会団） ・参加させる（他の児童）	1/12（水） 5校時 学活1時間	○みんなが楽しくできるような、学習発表会の内容を考えさせる。	○「学級会ノート」を活用し、理由をつけて発言できるようにさせる。 *「学級会ノート」
	【学級会】 「学習発表会の計画を立てよう」②	1/13（木） 5校時 学活1時間	○誰が何をするか、役割を考えさせる。	○一人一人のやりたい気持ちを優先に配慮する。 *「学級会ノート」
事後の活動	【学習発表会の練習】 ・それぞれの役割に分かれて、練習する。	1/14～2/5 学活2時間 生活2時間 国語2時間 体育2時間	○友達と仲良く、学習発表会の練習をさせる。	○実践のための時間確保や必要に応じて、用具や材料を準備する。
	【実践】	2/6（日） 生活1時間	○みんなで仲良く楽しく活動する。	○仲良く助け合えるように、声かけをする。
	【振り返り】	生活1時間	○活動や取り組みの反省や感想を書く。	○活動についての自己評価と友達の良かったことを書かせ次に生かせるようにさせる。 *「振り返りカード」

5 本時の指導

(1) ねらい

学習発表会の話し合い活動を通して、自分の考えを進んで発表し、互いのよさを認め合い、みんなが楽しくなるような学習発表会の内容を考えさせることができる。

(2) 授業仮説

話し合い活動において、自分の考えをしっかりとって参加し、ペアやグループで話し合うことによって、児童一人一人の意見が表出することができ、みんなの意見を聞くことで、互いに認め合いよりよい集団決定ができるであろう。

(3) 展開

課程	学習活動	教師の支援	○低学年の発達段階における工夫 ※評価
導入 5分	1 はじめのあいさつ	・大きな声で元気よくうたわせ、楽しくスタートさせる。 ・みんなに聞こえるように、大きな声で話させる。	○席は、コの字の配置にする。 ・全員の顔が見えるようにする。 ○自分の役割を自覚させる。 ・教師は、司会の側で、必要に応じて助言する。
	2 学級の歌		
展開	3 司会グループの紹介		
	4 議題の確認	・議題は、みんなで読み上げながら、再確認させる。	○話し合いの約束を、全員が守れるように、確認し進めていく。 ○提案理由は、事前に模造紙に書かせ、黒板に掲示しておく。
	5 提案理由の説明	・提案理由の補足を行い、話し合いについて見通しを持たせる。	○めあてを意識させるために、模造紙に書いて、毎回呼んで確認する。
	6 めあての確認		○教師は、司会者の近くに座る。
開	7 先生の話 (1) 学習発表会について (2) 条件の確認 ・日時・場所・対象者 ・内容の項目数（6つ）	 ・学習発表会と学芸会の違いを分かりやすく説明する。	○話し合いが進めやすいように、条件を出す。

30分	<p>8 話し合い 「どんなことをやりたいか」</p> <p>(1) 意見の確認</p> <p>(2) 質問・賛成・反対意見</p> <p>(3) 意見の選出 ・自分がやりたいものに、ネームプレートをおいて、意見を表出す (自己決定)</p>  <p>(4) 集団決定</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・日時・場所・対象者の掲示をする。 ・意見の出し合いをさせる。 ・自分の意見と比べながら、友達の意見を聞く。 ・賛成・反対の意見を述べさせる。 ・ネームプレートを、グループごとに黒板に置かせる。 ・意見がでなければ、グループで相談しながら意見をまとめさせる。 <p>(グループ活動)</p> 	<p>○事前に「学級会ノート」に、議題に沿った考えやその理由を書かせて参加させ、自信を持って発表させる。</p> <p>○自分の意見が発表できない児童には、隣の友達と相談させる。</p> <p>(ペア活動)</p>  <p>○ペアやグループで話し合いをするときは、時間を決めて話合わせる。</p> <p>※友だちの意見を聞いたり、自分の意見を発表するなど、話し合いに進んで取り組もうとしている。 ※「関心・意欲・態度」</p>
まとめ 10分	<p>9 決まったことの確認</p> <p>10 学級会の振り返り</p> <p>11 教師の話</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・決まったことを確認し、実践への意欲を持たせる。 ・「学級会ノート」に、振り返りを書かせ、発表させる。 ・話し合いで良かった点を賞賛し次回の話し合いの意欲づけにつなげる。 	<p>○めあてに沿って振り返らせ、友達の良かった意見や自分が頑張ったことなども書かせる。</p> <p>※「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」の評価は、「学級会ノート」から評価する。</p>

(4) 評価

- ・自分の考えを進んで発表し、互いのよさを認め合い、みんなが楽しくなるような学習発表会の内容を考えることができたか。

6 仮説の検証

学級活動における話し合いの場において、発達段階における話し合い活動を通して、互いに認め合い、児童一人一人の意見を大事にするような、望ましい人間関係がはぐくまれたかについては、実態把握のためのアンケート（11月5日と1月19日実施）とQ-U（10月7日と1月19日実施）の事前と事後の比較、検証授業ごとの振り返り（学級会ノート）、児童の様子などから検証する。

(1) 児童が互いに認め合い、一人一人の意見を大事にするような望ましい人間関係がはぐくまれたか。

① 話し合い活動のアンケートによる結果から

図1は、アンケートの質問項目「友だちの意見は最後まで聞いていますか」の結果である。事前と事後を比べると、「最後まで聞いている」「だいたい聞いている」と答えた児童が60%から100%と40ポイント上昇し、学級全児童が友だちの話を最後まで聞こうと言う気持ちになり、一人一人の意見に関心を持つようになり、互いに尊重し合える聞き方が身についたと言える。

このことは、話し合い活動の中で、毎回話し合いの約束を確認したり、「学級会ノート」に自分のめあてとみんなのめあてを書かせて意識づけをさせたことや、授業の振り返りで友だちのよかった意見や自分の頑張ったところを書かせることによって、友だちの意

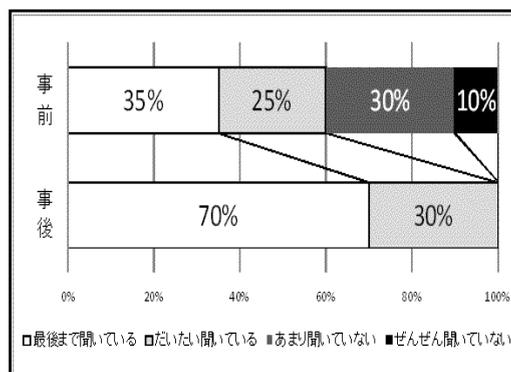


図1 友だちの意見は最後まで聞いていますか

見もしっかり聞こうという前向きな気持ちになったと考えられる。

次に、学級の雰囲気調べの項目である「みんなと一緒に協力してやることは楽しいですか」(図2)については、「とても楽しい」「まあまあ楽しい」と答えた児童が85%から95%と増え、ほとんどの児童が肯定的な回答をしており、学級の一員としての自覚と協力しようという仲間意識が高まったと言える。また、(図3)の「友だちのいいところを見つけることができましたか」については、「よく見つけた」「まあまあ見つけた」を含めると、60%から85%へと上昇した。そして、「2年2組は楽しいですか」(図4)の項目では、「とても楽しい」「まあまあ楽しい」と答えた児童が、90%から100%へと上昇し、学級全員の児童が学級生活に満足していることが分かる。その理由として、話し合い活動を通しての児童の感想から、「自分の意見にみんなが賛成してくれた」「発表をたくさんやってみんなにすごいと言われた」「みんなで仲良く話し合いができて楽しかった」など自分の頑張りが学級の友だちに認められ学級に対して満足している回答が上げられている。

このことから、話し合い活動をする時には、聞く・話すのマナーやルールを意識させたり、自分の考えや反対意見を述べる時には、必ず理由もつけて言うことの指導を行うようにしたことが、このようなよい結果につながったと判断する。また、意見がなかなか出ない場合にはペアやグループの活動を取り入れたり、司会者には、偏らない指名の仕方や採決の仕方を分からせるなどの工夫をすることにより、集団としての学級が活性化され、協力して互いのよさを認め合えるような望ましい人間関係をはぐくむことができたと考える。

② Q-Uテストの結果から

授業後のQ-U学級満足尺度の結果からQ-U群に占める児童の割合(図5)やQ-Uプロット図における分布図(図6)を元に学級の状態を分析してみると、学級生活不満足群に属していた32%の児童が0%に減り学級生活満足群と侵害行為認知群に移行している。特に要支援群に属していた児童の変化が大きいことが分かる。また、非承認群に属していた児童は21%から5%に減り学級生活満足群へ移行しつつある。そして、学級生活満足群が47%から79%へと大幅にポイントが上がり、20名中15名の児童が学級に満足していることが分かる。しかし、侵害行為認知群が、0%から16%にふえたことに関しては、Q-Uテストの「いごちのよいクラスにするためのアンケート」の項目中に「クラスの人に嫌なことをいわれることがありますか」「遊びの仲間に入れてもらえないことがありますか」のポイントが高い児童がこの16%(3名)の児童である。このことは、話し合い活動を通して、今まで発表を苦手としていた児童たちが自分の考えに自信を持つようになり、意見の対立や考えの違いが出てきたことで、他の児童とのトラブルが起こり、ポイントが

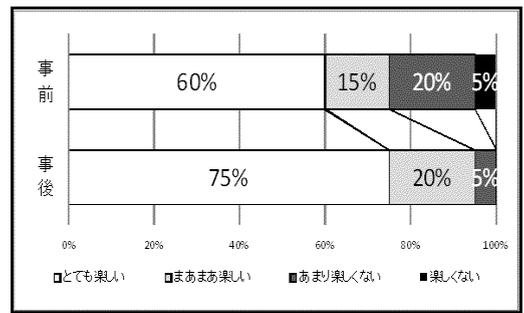


図2 協力してやることは楽しいですか

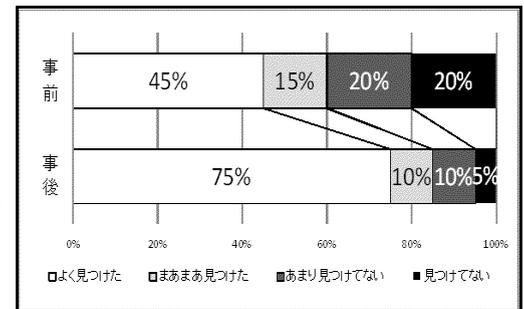


図3 友だちのよいところを見つけましたか

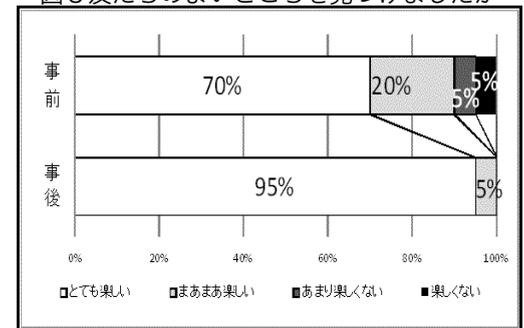


図4 2年2組は楽しいですか

10月		1月	
侵害行為認知群	0% ⇒ 16%	学級生活満足群	47% ⇒ 79%
学級生活不満足群	32% ⇒ 0%	非承認群	21% ⇒ 5%

図5 Q-U各群に占める児童の割合

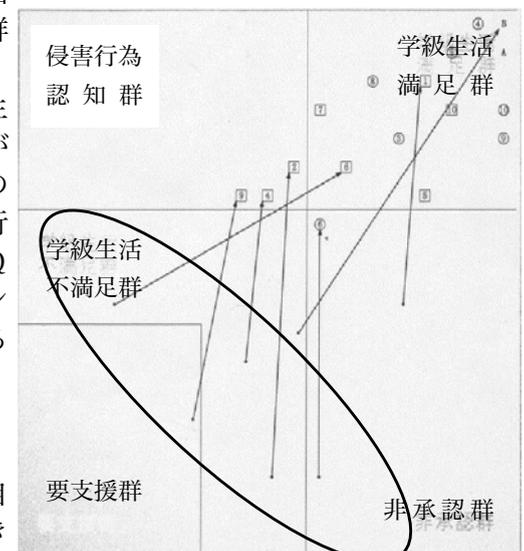


図6 Q-Uプロット図

高くなったのではないかと考える。そこで、意見の対立は一人一人の意見の表出につながり、見方によってはよい傾向ではあるが、侵害行為として感じている児童のために、教師の手だてとして、話し合い活動で少数意見や集団決定で決まらなかった意見に対して、みんなの意見を出し合えるようにすることが大事である。そして、話し合いで決まったことは気持ちよく実践することも大切なことであることを、学級で再確認する必要がある。また、「学校生活意欲プロフィール」から分析してみると、「友だち関係」「学級の雰囲気」「学習意欲」とも全国平均を上回り、学校生活を意欲的に活動していることが分かる。また、質問項目の中に、「何かしようとする時クラスの人は協力してくれますか」「友だちはあなたの話を聞いてくれますか」「授業の時に自分の意見を発表するのは好きですか」の質問で、20名中18名の児童が肯定的な答えになっている。

このことから、低学年の発達段階に応じた話し合い活動を工夫することによって、一人一人が自分の考えを出し合い、みんなで折り合いをつけて真剣に考えたり、振り返りでは、友だちの良い意見を発表し、互いに称賛することで、学級の雰囲気が良くなり、互いに認め合い、望ましい人間関係がはぐくまれたと考える。

(2) 児童一人一人が話し合い活動に積極的に参加するようになったか。

① 「学級会ノート」の工夫から

議題が決まると児童は事前に「学級会ノート」(図7)に自分の考えとその理由を書くように習慣化させると、議題に対して意識するようになった。その後、教師が児童の考えた理由に一言コメントを入れることで、自分の考えに自信を持つことができ、これまで、意見を一回も言わなかった児童が手を挙げて発表したり、友だちの意見に対して反論したりと積極的に話し合い活動に参加するようになった。そして、授業後は、常に自己評価で自分を振り返りさせる時間を設け、自分の意見が言えたかどうか反省することで、次はもっとがんばろうという意欲が見えてきた。

また、自分の考えが何回くらい言えたのかを視覚で確認できるように「学級会ノート」に発表カードを貼らせ、一回発表するごとに色をぬるようにさせたり、授業の振り返りで発表をたくさん言えた人(発表名人)をノート記録係の児童が発表するようにした。すると、最初は、色を塗ることを楽しみにしていた児童が、発表名人としてみんなの前で褒められることによって、他の児童にもよい刺激を与えてくれた。児童の振り返りの感想には、「学級会で初めて発表ができた」「発表が1回しかできなかったけどうれしかった」「大きな声で最後まではっきり言うのを頑張った」「2回以上発表ができた」「一生懸命発表した」など、やる気のある感想が多かった。

このことから、「学級会ノート」を工夫し、効果的に活用することで、児童が自分の意見に自信をもって人前で発表することができ、また、今まで一度も発表したことがなかった児童たちが発表するようになってきた。さらに、友だちの意見をしっかり聞き、自分の意見と友だちの意見を比べて聞くことにより、賛成・反対の意見も述べる児童が増え、一人一人の児童が話し合い活動に積極的に参加することができたと考えられる。

② アンケートの結果から

図8は、「話し合い活動は楽しいですか」の結果である。話し合い活動の事前と事後を比べると「とても楽しい」「まあまあ楽しい」と答えた児童が75%から100%に上昇し、課題であった「あまり楽し

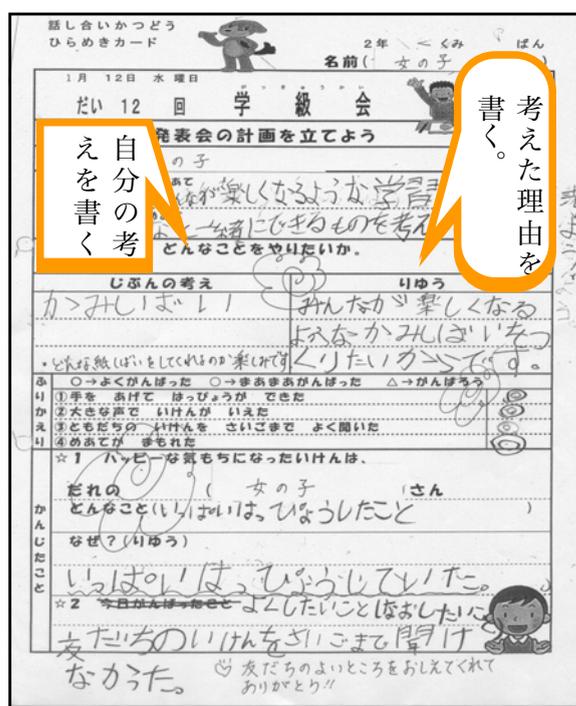


図7 学級会ノート

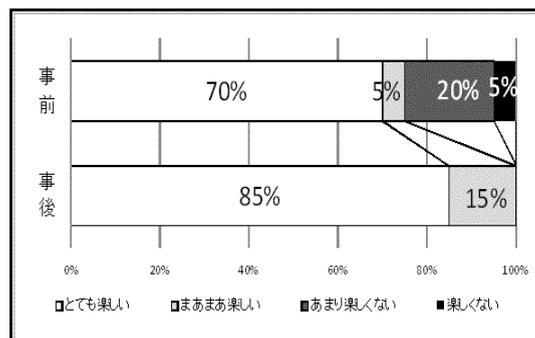


図8 話し合い活動は楽しいですか

くない」「楽しくない」の児童が25%が0%になっている。また、「自分の考えを進んで発表しますか」（図9）の質問に対して「進んでできる」「できる」と答えた児童は60%から85%に増え、ほとんどの児童が発表するようになってきた。特に、今まで発表を苦手とする児童がどんどん発表するようになり、話し合い活動が以前よりも活発になってきた。

このことは、低学年の発達段階に応じてあらかじめ示された話し方や手順に従って意見を発表させる指導や、自分の考えをしっかりとって参加することで自信を持って積極的に参加するようになってきたことが考えられる。具体的な児童の声としては、「自分の意見が言えてうれしかった」「発表がたくさん言えるようになった」「話しをするのが楽しくなった」「みんなの意見が仲良くまとめられた」「いろんなことを決めてハッピーな気持ちになった」など話し合い活動で、学校生活を向上・発展させることができたと実感できたようである。

「司会や副司会をやってみたいですか」（図10）の質問に対して、「とてもやってみたい」「やってみたい」と答えた児童は75%から95%に増えてきた。

このことは、話し合い活動で計画委員を5人グループの4つに編成し、輪番制で役割を与えたことや司会団と教師の座席(写真1)を位置づけをしたことによって自分の仕事に自信がつき、話し合い活動の楽しさが分かり、積極的な態度が身についたと考える。そして、話し合い活動を準備・運営する場において、低学年なりの話し合いの準備及び進め方を示し経験することで、児童一人一人が積極的に参加しようという、前向きな考えにつながったと判断する。

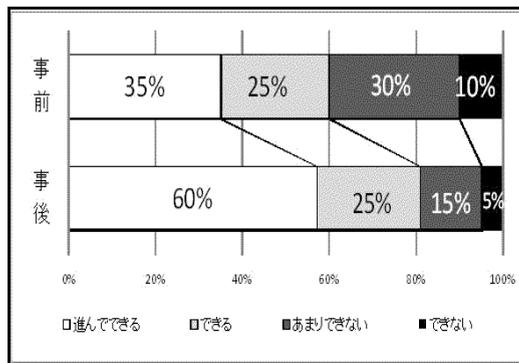


図9 自分の考えを発表できますか

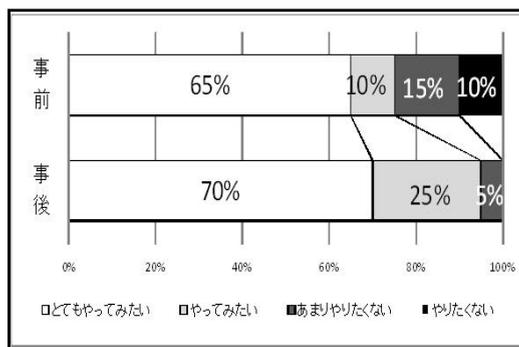


図10 司会や副司会をやってみたいですか



写真1 司会団と教師の座席の位置

成果と課題

1 成果

- (1) 「学級会ノート」や教師や児童からの賞賛等、低学年における話し合い活動を工夫することにより、一人一人の意見が大事にされ、互いのよさを認め合えるような望ましい人間関係をはぐくむことができた。
- (2) 低学年の発達段階における「事前活動の指導」「本時の指導」「事後活動の指導」を一つの型としてまとめ、話し合い活動における教師の指導モデルを作成することができた。
- (3) 話し合い活動の中で、児童が自分の考えをしっかりとって参加し、互いの意見を尊重する中で、折り合いをつけてよりよい集団決定ができるようになってきた。

2 課題

- (1) 話し合い活動の中で、発達段階における評価の工夫をどうするか。
- (2) 学級活動の年間指導計画に、望ましい人間関係づくりをどのように位置づけて指導するか。

〈主な参考文献〉

- 相原次男・新富康央・南本長穂 2010 『新しい時代の特別活動』 ミネルヴァ書房
 杉田洋 2009 『よりよい人間関係を築く特別活動』 図書文化
 國分康孝・清水井一 2007 『社会性を育てるスキル教育』 図書文化